

臨床部門

教育に関連する臨床心理学研究の動向と課題

伊藤 義美

(名古屋大学大学院環境学研究科)

1. はじめに

本稿では、2002年10月に開催された日本教育心理学会第44回総会(臨床部門)と同年9月に開催された日本心理学会第66回大会(臨床・障害部門と教育部門)で発表された研究、2001年7月から2002年6月までに発行された教育心理学研究(年4回発行)、心理学研究(年6回発行)、心理臨床学研究(年6回発行)及びカウンセリング研究(年3回発行)のうち、教育臨床つまり臨床部門に分類される研究のなかで特に教育や教育現場と関連が深いものを概観して紹介する。なお、教育に関連する臨床心理学研究は、日本心理臨床学会第21回大会(2002年9月)や日本カウンセリング学会第35回大会(2002年8月)などでも数多く発表されているが、今回の報告では割愛することにする。臨床心理学の実践や研究は幅広いものがあるが、教育とはどのように関わっているのか。今年度発表されてきた、教育に関連する臨床心理学的研究にはどのような特徴がみられるか、研究内容を紹介しながら研究の動向とその問題点、及び今後への課題について明らかにしたい。

2. 教育分野における臨床心理学研究の動向

最近の教育心理学会における臨床部門の研究動向として、不登校が社会問題化していることと相応して不登校やスクールカウンセリングに関する研究が多くなされている(井村, 2000)。また昨年度の研究について、スクールカウンセラー関連の実践報告の割合が高くなっており、

また内容ではスクールカウンセラーの様々な役割や取り組み方法に関する言及が多いとされている(伊藤, 2001)。このような傾向は、引き続いて今年度もいえそうである。

2001年度と2002年度に日本教育心理学会の臨床部門において発表された研究について、テーマ別に表したのがTABLE 1である。このTABLE 1によると臨床部門全体での今年度の発表数は、昨年度よりも少なくなっている。しかし昨年度と同じく、スクールカウンセリング、不登校、児童・生徒への調査、教師への調査、臨床事例、方法論が大部分を占めていることがわかる。不登校の研究はあまり変わらないが、スクールカウンセリング関係の研究がやや増え、教師への調査研究が減少している。児童・生徒への調査がかなり増えている。臨床事例はやや少なくなっているが、その対象や内容は様々である。方法論はやや減ったが、様々な心理アセスメントやカウンセリング的アプローチなどが含まれている。

3. テーマ別にみた研究の動向

ここでは、先に述べた文献の中から教育に関係が深い研究を、スクールカウンセリング・適応指導教室に関する研究、不登校に関する研究、児童・生徒・学生に関する研究、教師に関する調査研究、臨床事例、方法論に分けて紹介していく。なお、日本教育心理学会第44回総会と日本心理学会第66回大会での発表は、発表論文集のプログラム番号で明記することにする。

TABLE 1 日本教育心理学会総会・臨床部門での発表件数とその割合(%)

発表内容	2001年度	2002年度
スクールカウンセリング・適応指導教室	12(11.2%)	13(17.1%)
不登校	9(8.4%)	7(9.2%)
児童・生徒への調査	20(18.7%)	26(34.3%)
教師への調査	17(15.9%)	7(9.2%)
臨床事例	15(14.0%)	8(10.5%)
方法論	24(22.5%)	12(15.8%)
その他の調査	10(9.3%)	3(3.9%)
合計	107(100.0%)	76(100.0%)

1) スクールカウンセリング・適応指導教室に関する研究

平成7年度から小中高学校にスクールカウンセラー(以下、SCと略記)が配置されるようになってきている。SCとしては、学校臨床心理士をはじめ学校心理士、「心の教室」相談員、メンタルフレンドなど様々なものが含まれている。学校へのカウンセラー導入は、各市町村においてその勤務形態、活動内容、相談員の身分などの規定は、各県によって異なっている。その活動がどのようになされているのか、十分に確立されたものではない。しかし一種の運動として拡大・充実する方向で展開されているといえるだろう。

(1) SCへの期待と相談活動の実態

まず現場の教師がSCにどのような期待をしているかであるが、原(PA68)は、配置校と非配置校の中学教師がSCにどのような援助を望んでいるかを明らかにしている。SCが教師や学校組織に働きかけ、生徒・保護者・教師の間の仲介する11の項目で、配置校の方が有意あるいは有意傾向がみられた。杉崎(PG68)は、中学校教員を対象に発達障害(LD, 自閉症, ADHD)の生徒についてSCに望むことを調査している。障害理解の手助け、外部機関との連携推進、周囲の人のメンタルサポート、本人への個別対応の順に望まれていた。これらは、SCについての現場教師の意識調査である。

相談活動の実態について栗加・遠藤(PE70)と遠藤・栗加(PE71)は、千葉県のSCの受理相談をSCの属性と相談活動から分析している。それによると、女性のSCは男性のSCよりも相談を多く受け、特にいじめ、部活動、家庭の問題を多く受けた。相談件数は、不登校の相談は高校よりも中学校に、1, 3学期よりも2学期に、また配置2年以降のSCに多いことが示された。時間をかけて1つの学校に定着し、児童生徒、教職員や保護者と地道に関係を作りながら様々な活動を通して相談しやすい雰囲気ができるような環境の整備をも視野に入れたSCの配置が望ましいとしている。

(2) 教育相談・適応指導・メンタルフレンド・心の教室

現場の教師も教師カウンセラーとして、教育相談や適応指導を行っている。浅田・中村(PC82)は学校現場の教育相談係として、女子高生のカンニング問題への対応をめぐって学校組織全体の指導援助態勢を調整し、学校組織での教育相談活動の活性化を試みた事例を報告している。

これまで不登校児童・生徒などの支援事業のひとつとして、適応指導教室、メンタルフレンド、心の教室などが実施されてきている。甲木・中村(PF88)は、適応指導教室「光の森」(吹田市)の現状と課題を述べて、発達支援

やソーシャルスキルの学習が今後必要であるとしている。河本(2002)は、適応指導教室の目的と援助活動に関する指導員の意識を質問紙法によって調査している。目的として、子どもの自立を支援する場、学校生活への復帰を支援する場、指導や援助を組織的計画的に行う場の順で賛同されていた。援助活動の因子としては、心理臨床的アプローチ、学習アプローチ、心の育成、集団活動、外部との連携、組織内の連携の6因子が抽出された。指導員は、目的に応じて援助活動を使い分けていた。

東(2001)は、ある街のメンタルフレンド事業に参加し、2人の引きこもりがちの不登校男子中学生に対して訪問面接を行った事例をもとに、約2年間のメンタルフレンド活動全般にわたって考察している。中村(PC81)は、「心の教室」学生相談員の意識調査を行っている。

(3) コンサルテーション

SCとしての特徴的な活動としてコンサルテーションがある。野々村(2001)は、高校生の3事例の学校教師へのコンサルテーションを報告している。コンサルテーションにおけるスクールカウンセラーの役割と実践上の工夫を、①アセスメントについて②柔軟性と安定性について③主役は常に生徒について④共同作業と役割分担について、の4つの観点から提示している。小林(PC80)は、教師への具体的なコンサルテーションの内容を客観的に検討している。

渡部(2002)は、公立中学校におけるスクールカウンセラーとして担任とともに不登校生徒の対応に当たった事例を報告している。担任へのコンサルテーションを糸口に、母親の学校内相談室への来談が実現し、担任が部分的に同席するカウンセラーによる母親面接が継続した。そこから担任による家庭訪問も可能になった過程が示され、学校内相談室での面接の特徴や思春期の母子の分離について考察している。

(4) SCのストレス

現場教師だけでなく、SCもかなりのストレスをこうむることになる。今津・荻野(PA70)は、小・中・高のSCのストレスに関する調査を行い、その勤務形態や個人属性の差異がストレスサーやバーンアウトの変数に与える影響について検討している。その結果小学校のSCにおいて身体的疲労感や情緒的消耗感が高く、年齢とSC及び現職場経験年数が低いほうが情緒的消耗感が高い傾向があった。SCへのサポート態勢の充実が重要であることが示唆された。

(5) 修学問題

田中(2002)は、学生相談において語られる修学上の具体的問題の背後にある、心理的な意味で学ぶことの困難について2事例を取り上げて考察している。そして面接

関係のなかでの修学問題の位置づけに関して、第一段階として面接者への「教育というコンセプトにおける投影」を扱うことの重要性と、修学の現実的問題の援助も扱う工夫を述べている。

(6) アプローチモデル

藤田(2002)は、非行少年の悩み方に焦点を当てた仮説的アプローチモデルを提示し、仮説モデルの実践的有効性を検討している。ここで仮説援助モデルは、〈悩まない—ごまかし型〉、〈悩まない—直面化型〉、〈悩んでいる—まぎらわし型〉、〈悩んでいる—とらわれ型〉の4類型である。〈悩んでいる—とらわれ型〉を除いては援助モデルに従った援助が有効であることが判明したとしている。栗原・上地(2001)は、学校におけるカウンセリングを、ブリーフカウンセリングを中心に展望を行っている。

問題やタイプに応じたアプローチモデルの開発も、今後の重要な課題だろう。

一方ではSCの配置が定着し、相談活動もある程度安定しつつあるが、今後、SCに期待される役割や活動内容は多様となることが予想される。したがってSCのストレスも増大することだろう。スーパーヴィジョンや研修などSC自身をサポートするシステムを確立することが重要となるだろう。

2) 不登校に関する研究

不登校に関する研究も昨年同様にかなり発表されている。

(1) 自然体験キャンプの追跡調査

上原(PA69)は、自然体験キャンプを経験した不登校の小中学生に追跡調査を行っている。キャンプ終了3ヶ月後では、再登校66名(21%)、改善傾向209名(68%)、変化なし33名(11%)であった。さらに対象者は、長期にわたって良好な効果を維持しているようであった。このような追跡研究は貴重であるが、参加者はどのような体験なり要因が効果的と感じているかを明らかにすることが必要だろう。

(2) 小児アレルギー疾患

松寄ら(2001)は、小児アレルギー疾患児で併せて不登校を訴えて受診した107事例の診療記録と、カウンセリングを受けた61家族のアンケート調査を分析している。それによると、①不登校の少し前の状態としてアレルギーの悪化を答えたものは57%と高い、②アレルギーの改善が不登校の改善につながったと感じているものは37%、③83%がカウンセリングを有効に感じ、主に支持的な関わり、問題解決への具体的な話し合いが有効と感じていた。慢性の疾患と併せて不登校を訴えている場合、医師との連絡を密にとり、身体的な改善と学校の問題の改善

という双方からのアプローチが重要であった。

このように複数の視点からより全体的に対応していくことが必要である。

(3) 不登校傾向と出欠席

五十嵐・萩原(PC84)は中学生における不登校傾向尺度を開発し、「別室登校を希望する不登校傾向」、「精神・身体症状を伴う不登校傾向」、「遊び・非行に関連する不登校傾向」、「在宅を希望する不登校傾向」の4因子を見出している。さらに萩原・五十嵐(PC85)は、不登校傾向尺度と被援助志向性の関連を検討している。「別室登校を希望する不登校傾向」高群は、低群より「援助関係に対する肯定感」「援助関係の欲求」得点が有意に低く、「精神・身体症状を伴う不登校傾向」高群は、低群よりも「援助の欲求」得点が高い一方で、「援助関係に対する肯定感」「援助関係の欲求」得点が有意に低かった。「遊び・非行に関連する不登校傾向」高群は、低群より「援助関係に対する肯定感」得点が有意に低かった。「在宅を希望する不登校傾向」高群は、低群より全ての下位尺度で有意に得点が低かった。援助を求めているのは「精神・身体症状を伴う不登校傾向」高群のみで、とりわけ「在宅を希望する不登校傾向」高群は低群に比べて援助関係に肯定的でないばかりかその関係を欲しておらず、援助自体が必要でないと感じている傾向が示された。

古市・辻(PF85)は小学生5、6年生を対象に、学校に行きたくないときの欠席群と出席群を比較し、出席群は級友適応が良好であることを見出した。つまり、学校へ行くのが嫌になっても、友だちとの関係がよい小学生は登校を続けるのである。本宮(1AM026)は「不登校現象」への援助は、生理・心理・社会・実存・魂の様々な各クライアントの問題への援助の窓口としてあるとしている。

不登校の意味を考えて援助に取り組む必要があるとともに、予防の点からも、登校児童・生徒の不登校傾向や出欠席の研究が求められるところである。

3) 児童・生徒・学生に関する研究

(1) 小学生への実践研究—S-HTPとCSST—

小学生に対して実践的な研究がなされている。一丸ら(2001)は、小学6年生男子の通り魔殺人事件が児童に及ぼした影響をS-HTP(統合型HTP法)による描画によって検討している。学校関係者への心理的支援活動の一環として、全児童を対象にS-HTPが3回継続実施された。描画を検討した結果、事件が児童に及ぼした心理的影響について、①影響は「興奮」と「麻痺」の2タイプに分けられた②影響がみられたのは1回目40%で、その後時間経過とともに減少した③1回目は麻痺タイプが多かった④男子の方が影響を受けやすかった⑤時間経過に

よる変化パターンはいくつかに分けられた⑥被害者に近い立場の児童には影響がより強烈に現れた、といった点が明らかにされた。また、児童にとっての描画表現の有用性が検討された。

藤枝・相川(2001)は、小学校で学級単位の社会的スキル訓練(Classwide Social Skills Training: CSST)を実施し、その効果を実験的に検討している。実験学級と統制学級を設定し、各学級における社会的スキルの程度の低い児童(各10名)を対象とし、(a)社会的スキルの児童自己評定尺度、(b)社会的スキルの教師評定尺度、(c)5つの目標スキルの児童自己評定尺度を実施した。(a)と(b)は同一項目で構成され、攻撃性・向社会性・引っ込み思案の3因子から構成されていた。これらの尺度を、CSST開始前から終了後まで計4回実施した。(c)は各目標スキルのCSST実施1週間前と1週間後に行った。(a)の結果からは、CSSTの効果は証明されなかった。(b)の結果からは、CSSTの有意な効果が証明された。(c)の結果からは、「じょうずなのみ方」スキル、「あたたかいことわり方」スキルにおいてのみCSSTの有意な効果が証明された。明確な効果が出なかった理由として、CSSTの実施方法、目標スキルの選定方法、夏休み期間中の児童への働きかけの欠如などが考察された。

このような実践的、実験的研究は貴重であり、今後もこの種の研究が増えることが期待されることである。

(2) 中学生への調査研究

ここでは、中学生の生徒文化、学校適応、テレビゲーム、心理的ストレス・プロセスが扱われている。

① 生徒文化と学校適応

加藤・大久保(PF92)は、中学生を対象に問題行動が起こるクラスと起きないクラスが「不良少年」についてもつイメージを比較し、問題行動の発生・展開とクラスに特有な生徒文化が関係していることを示唆している。

粕谷・河村(2002)は、中学生に学校生活満足度尺度を用いた学校不適応のアセスメントと介入の視点を検討している。教師がソーシャル・スキル、自尊感情、欠席理由の背景などの具体的視点を持ち、アセスメントを行いながら援助していくことが必要であると示唆している。塚野・金木(PE72)と金木・塚野(PE73)は、中学生の学校適応度と自己の価値づけの関連を検討している。学校適応ごとで過去・現在・未来に対する自己の価値づけ方は異なり、学校適応には自己受容の高さ、未来に対するプラスイメージと前向きな態度が関係することが明らかになった。

② テレビゲームと心理的ストレス・プロセス

川口ら(PF79)と井上ら(PF80)は、テレビゲームが中学生の心理に及ぼす影響を調査している。長時間テレビ

ゲームを行うものは衝動性が強かった。ホラー系・格闘技系=戦闘的・暴力的なゲームはストレス発散に効果があり、そのことが何らかの心理的安定をもたらし、それが対人関係の良好さや臆さない心的態度に好影響を及ぼしているのではないかと考察している。

岡田(2002)は、中学生の心理的ストレス・プロセスにおける二次的反応の生起について検討している。二次的反応のカテゴリーとして探索的因子分析の結果、「攻撃」、「引きこもり」、「無気力」、「依存」の4因子が得られた。これらと学校ストレスから情動反応を経た後の関係について検討すると、「攻撃」、「引きこもり」、「無気力」、「依存」の反応は情動反応が高まってから生起する二次的反応であるという仮説に反しないものだった。また、同じ二次的反応でも、その種類によっても生起パターンが異なることを明らかにしている。

(3) 高校生への調査研究

—教師の対応・食行動異常・対人恐怖—

ここでは、高校生が教育相談で期待する教師の対応、食行動異常と痩せ願望、対人恐怖が取り上げられている。

瀧野・宮本(PF86)は、高校生が教育相談において期待する教師の対応を検討している。対応としては、話し合い、積極的介入、共感的理解、公正厳格があり、女子は男子よりも話し合いを強く期待していた。教師が対象に応じて対応の仕方を操作することにより、教育相談のきっかけづくりが可能になり、効果的な援助が期待できるのではないかとしている。

田中(2001)は、高校生男女における食行動異常と痩せ願望の実態を質問紙法で調査している。実際の体重よりも、痩せ願望が食行動異常に深く関与していることなどが明らかにされた。

福井(2001)は、高校生男女を対象に対人恐怖としてふれあい恐怖、他者視線恐怖、自己視線恐怖、赤面恐怖、体臭(自己臭)恐怖、外見恐怖を見出している。そしてすべての類型に共通して対人回避傾向があり、これら6類型の背景には自己愛パーソナリティ傾向があり、強迫性によって症状形成の形態が異なり、各類型における症状形成のメカニズムの様相を明示していると捉えている。

(4) 大学生への調査研究

ここでは、大学生の対人恐怖と孤独感、ネガティブな反すう、摂食障害傾向と非理性的信念、自己愛人格の構造、対人恐怖心性と自己愛傾向、無気力感、気晴らし方略が取り上げられている。対人恐怖、摂食障害、自己愛傾向、無気力などは、現代青年の重要な研究テーマである。

① 対人恐怖心性，ネガティブな反すう及び摂食障害傾向

清水 (2001) は，大学生における対人恐怖心性と孤独感の関連を質問紙法によって検討している。他者との共感性を認識できることが対人恐怖心性を低減し，また，個別性に気づくことにより対人恐怖心性を多く認識するという結果が得られた。孤独感類型判別尺度によりA型とD型を比較すると，A型よりもD型の方がより多くの対人恐怖心性要因から影響を受けていることが示された。

伊藤・上里 (2002) は，大学生を対象にした8カ月間の調査の結果から，ネガティブな反すうがうつ状態のリスクファクターのひとつであることを明らかにしている。

早野 (2002) は，男子大学生を対象にして摂食障害傾向と非理性的信念に強い関連を認めた。摂食障害傾向の有無とあわせて非理性的信念を測定することで，行動変容の段階に応じたアセスメントと，適切な予防教育が可能になるとしている。

② 自己愛人格と自己愛傾向

相澤 (2002) は，誇大特性と過敏特性からなる自己愛的人格の構造を検討している。自己愛的人格項目群(67項目)を作成し，YG 性格検査の10下位尺度とともに大学生・大学院生に実施し，「対人過敏」，「対人消極性」，「自己誇大感」，「自己萎縮感」，「賞賛願望」，「権威的操作」，「自己愛的憤怒」の7因子を抽出した。YG 性格検査との関係を検討したところ，各下位尺度の併存的妥当性が確かめられた。共分散構造分析を用いて自己愛的人格項目群の潜在変数に関するモデルを検討した結果，「誇大自己」と「萎縮自己」の2つの自己イメージから「自己愛的傷つき易さ」が生じるという潜在因果関係のモデルが，十分な適合度(GFI)を示した。清水・海塚 (2002) は，大学生及び大学院生を対象に対人恐怖心性と自己愛傾向の関連を検討している。対人恐怖心性とは自己愛傾向には有意な負の相関がみられた。クラスター分析を行った結果，対人恐怖心性とは自己愛傾向のパターンには，4つのサブパターンがあることがわかった。それらは，「純粋な」対人恐怖，「過敏型」自己愛人格，「ふれ合い恐怖的心性」に類似したもの，「無関心型」自己愛人格と解釈された。このうち「過敏型」自己愛人格と「無関心型」自己愛人格は，対人恐怖心性が自己愛の影響を大きく受けていることがわかり，自己愛の高まりが対人恐怖心性を増大させていることが示された。

③ 無気力感と気晴らし方略

下坂 (2001) は，青年期における無気力感の各学校段階(中学生，高校生，大学生)における特徴を明らかにしている。質問紙は，無気力，学校適応感及びソーシャル・サポートなどにより構成された。無気力感尺度には，自己

不明瞭，他者不信・不満足，疲労感の3つの因子が見出された。自己不明瞭と疲労感は大学生段階で低下し，他者不信・不満足は男女で発達の様相が異なっていた。中・高生においては，学習意欲や友人関係についての学校適応感が，無気力感と関連していた。大学生女子よりも大学生男子において，友人サポートが他者不信・不満足と強く関連していた。

及川 (2002) は，気晴らし方略の有効性を高める要因を明らかにするために大学生を対象にしてプロセスの視点から検討している。その結果，(1)気晴らしに集中できないほど気分悪化が強まり，気分悪化が強まるほど気晴らしへの依存が強まること，(2)気分調節の自信は気晴らしへの集中を高め，気分悪化を弱めること，(3)気晴らしの意図には目標明確化志向，気分緩和志向，無目標という多様性があり，どのような意図で気晴らしを行うかが集中の程度や結果に影響を及ぼすことが示唆された。効果的な気晴らしには，特に気分調節の自信と集中，目標明確化志向に注目した介入が有効であることが考えられた。

4) 教師に関する調査研究

このところ精神疾患を理由とする教師の休職が増えており，また休職をしなくても燃え尽きた状態で仕事をしている教師の姿もうかがえる。生徒が不登校，学業不振，人間関係といった問題に悩み，それと同時にその解決に立ち向かう教師も苦痛を伴っている状況である。学習指導要領の変更や，ゆとり教育の導入に伴う新たなカリキュラム編成など生徒に関わる問題だけでなく，教師にとっての問題は様々なところで生起していると考えられる。ストレスによって引き起こされる教師の心身の不健康さは児童生徒にも影響するので，教師のメンタルサポートに関する取り組みや研究もいっそう必要となってくるだろう。

(1) 児童と教師の認知のずれ

藤村・河村 (2001) は，学級担任と，その担任する学級の児童を対象にして，児童が認知する学級生活に対する満足度とそれを捉える担任教師の認知を比較することによって教師の児童理解の実態を調査している。その結果，(1)担任教師は，学級生活に対する児童の満足度を低めに捉えている，(2)5年以下の教職経験の短い担任教師と16年以上の教職経験の長い担任教師は，児童認知と教師認知とのずれが大きい，(3)現任校在籍年数が5年目以上の担任教師は，児童認知と教師認知とのずれが小さい，(4)担任1年目の教師は，持ち上がりの教師より児童認知と教師認知のずれが小さい，(5)ずれが小さい教師の学級は，学級生活に適応している児童が多い，ことが示唆された。

(2) 教師のビリーフと信念

西村 (PA74) は、教職員間の関係性に関するビリーフと職場信頼感の関係を明らかにしている。「自分を犠牲にしなければ、職場の人間関係はうまくいかない」「教師は人前で失敗するところを見られるべきでない」「教師は一度信用をなくすと、もうおしまいである」「管理職に認めてほしかったら、従順に振舞うべきである」といったビリーフは、イラショナル性が高いビリーフと考えられた。

教師が教職上の信念を持ち周囲に対して明確かつ了解可能であることは、学級経営や授業を行う上で重要である。田代・川原 (PA79) と川原・田代 (PA80) は、教師の持つ信念 (教師が職務を行うにあたって心の中にある確固とした拠りどころとなる考え方) とその不合理性について、教師個人の心理状態や周囲の状況との関連で検討している。「依りどころとなる信念を持ち、それを基に相手にうまく伝えていく」ことの重要性が示唆された。

(3) 教師の心理的ストレスとバーンアウト

三根ら (PA71) は、保育職における心理的ストレスを調査している。私立幼稚園在職者においては、物に集中できない、あるいは頭痛や疲労感といった形でストレス反応を示している者が保育所在職者より多い可能性が示唆された。

田村・石隈 (2001) は、指導・援助上の困難に直面した中学校教師の被援助志向性を、加えてバーンアウトとの関連を明らかにしている。男性教師は、教師自身の指導・援助に対する同僚からの批判を感じている人と、同僚に助けをもらうことに抵抗のある人にバーンアウトは深刻だった。同僚からのソーシャル・サポートがある人のバーンアウトは低かった。女性教師の場合は、生徒からの反抗の多い教師と、同僚に助けをもらうことに抵抗のある人にバーンアウトは深刻だった。援助関係に対する教師の抵抗感を低くする、教師の抵抗感がある程度高くてもその教師を援助できるシステムを構築することが考えられた。平岡・乾原 (PA75) は、教師のバーンアウトの因果関係モデルを検証しようとしている。教師のバーンアウトの予防・軽減には組織的な取り組みを要すること、バーンアウトは生徒をネガティブに認知することにつながり、教師・生徒関係にも影響を及ぼすことが考えられ早急な予防法究明が求められると述べている。

(4) チーム援助のコーディネーション行動

コーディネーションに関する研究は、新しいものである。瀬戸・石隈 (2002) は、高校におけるチーム援助のコーディネーション行動とその基盤となる能力及び権限について検討している。コーディネーション行動は、個別援助チームレベルでは、説明・調整、保護者・担任連携、アセスメント・判断、専門家連携の4因子、システムレ

ベルでは、マネジメント、広報活動、情報収集、ネットワークの4因子が見出された。またコーディネーション能力・権限は、状況判断、専門的知識、援助チーム形成、話し合い能力、役割権限の5因子が見出された。能力・権限がコーディネーション行動に与える影響は、役割によって影響のあり方が異なったが、援助チーム形成能力は役割を超えて影響力が強かった。

(5) 学生相談

高野・宇留田 (2002) は、援助要請行動から見たサービスタとしての学生相談を考察し、学生サービス担当者による心理教育活動の充実、学生の自主グループの組織化と支援や、他職種とのコラボレーションによるシステム構築の必要性を指摘している。宇留田 (PG77) は、大学教員による学生相談機関の活動の評価を半構造化面接によって明らかにし、カウンセラーと大学教員が協働して相談システムを構築することを考えている。

5) 臨床事例

発表された臨床事例は、その対象が様々であり、その経過や成果等が報告されている。

(1) 不登校とひきこもり

不登校の事例としては、以下のものがある。久能ら (PE82) は、癲癇症状をもつ不登校の男子中学3年生に対して学習支援を、またその母親に対して面接を行った事例を報告している。塩路 (PG75) は、過食症により不登校になった女子高校3年生についての教育援助の事例を報告している。小野 (2001) は、男子小学5年生の不登校に午後登校法を適用した事例を報告している。小林ら (2002) は、不登校状態のまま中学を卒業した少女の問題行動に対する行動カウンセリング的介入を報告している。

松本 (2002) は、2年間の下宿でのひきこもりの末に来談した女子大学生との面接事例を報告している。ゲシュタルト療法を用いたアプローチが自己像の混乱のなかでひきこもっていたクライアントにとって大きな転機になったとしている。これらは、いずれも治療事例である。

(2) 非行

非行の事例としては、以下のものがある。中島 (PG71) は、3事例を用いて矯正教育を通して非行少女がどのように立ち直るかを、作文における自己に関する記述 (自己物語 self narrative) の変化を通して考察している。収容期間を5等分して、過去・現在・未来の自己についての記述を検討すると、第III期、第IV期において現在の自己についての否定的な物語が多くなり、自己像も否定的になりがちな状態に一時陥る。その後自己を肯定的に物語れるようになる。「現在の自己を正直に見つめる」ことは、自己像及び自己物語の変化に結びつき、非行からの立ち

直りにつながる重要な作業だとしている。

外川・岡田 (PE79) は、少年院退院時に実施した TAT を用いて、入院時の反応と意識して反応したケース 2 名と意識しなかったケース 2 名を比較して非行少年の教育効果を査定している。処遇効果の査定において、反応を意図的に操作しようとする場合その態度自体も解釈に含めれば、変わろうとする意志や、変化を可能にする自我の力に関する情報が得られ解釈上有効であるとしている。

(3) 自閉症児と発達障害

石川 (PF87) は、「見通しの展開」によって「コミュニケーションの広がり」を示した自閉症男児 (8 歳) の事例を報告している。久保田ら (PF83) は、発達障害の疑いがある中学 1 年男子にスチューデント・サポート・チーム (SST) を適用した援助事例を報告している。

(4) パニック障害と過剰適応

児島ら (PE69) は、友だちができないと訴える高校 1 年の男子生徒に対する相談面接の事例を報告している。伊藤・田上 (PF93) は、パニック障害の医療系大学 3 年生女子に担任が学習の場で行うカウンセリングの効果を考察している。

杉原 (2001) は、過剰適応的な男子大学生との面接経過を報告し、アイデンティティ発達の過程とそこへの介入について考察している。

6) 方法論

(1) 主に臨床心理アセスメント

① 投影法

桑代ら (PC89) は、ひきこもりの男子青年 4 事例に対してバウムテストを行い、バウムテストに現れた樹冠をその形成段階を用いて分析している。樹冠や枝が描かれていないものや子どもじみた奇妙な形態の枝が描かれるなど、未成熟な描写が認められた。樹冠の輪郭線の断線が見られ、自我と外界の境界が定かでないとして解釈され、環境との関係の障害を表しているとしている。高倉 (PA67) は、小学生の KFD (動的家族画) にみられた性差と単親家庭の描画の特徴を明らかにしている。

佐藤 (2002) は、大学生を対象にしてコラージュ制作者の性格特性 (YG 性格検査) と作品特性の関係を検討している。切片数は、制作者の情緒的適応状態と内向—外向特性を反映する指標とみなされた。一般的活動性が高いほど乗物図版が多く使われる傾向があった。目図版の使用者は、抑うつ傾向が高かった。ストーンサークル図版の使用者は、情緒的適応が良好で外向的傾向があった。佐野・田中 (PE74) と田中・佐野 (PE75) は、コラージュ作品とメンタルヘルス指標 (CMI の精神的自覚症項目と POMS) の関連を検討している。

② 心理尺度や質問紙

鈴木・小塩 (PC87) は、大学生を対象に対人的傷つきやすさ尺度 (10 項目) を作成し、信頼性と妥当性を検討している。小塩ら (2002) は、大学生を対象に精神的回復力尺度を作成し、信頼性と妥当性を検討している。綿井ら (PE80) と菅野ら (PE81) は、「精神的充実・社会的適応力」評価尺度が生徒理解・指導や教育相談に有効であるとしている。

飯田・石隈 (2002) は、54 項目からなる学校生活スキル尺度 (中学生版) を作成している。この尺度は自己学習スキル、進路決定スキル、集団生活スキル、健康維持スキル、同輩とのコミュニケーションスキルの 5 つの下位尺度から構成されており、ある程度の信頼性と妥当性が確認されたとしている。

佐々木ら (2002) は、主要な 4 つの精神病理の症状と性格 5 因子モデルとの関係を検討している。抑うつ、不安、妄想的観念、強迫症状の症状尺度について同時に因子分析して、4 つの因子 (負感情の妄想的観念、不安・抑うつ・強迫症状の「疑惑」・「確認」、正感情の妄想的観念、強迫症状の「清潔」・「緩慢」) を抽出した。各症状尺度が性格因子モデルのどの特性と相関があるかを検討すると、因子内の症状との相関はそれぞれの因子内でほぼ同じ相関のパターンを示した。症状の潜在変数と性格特性との相関を検討すると、因子間で相関のパターンが異なることがわかり、素因としての性格特性の影響を反映した因子構造が得られた。

生月ら (2002) は、20 項目からなる自律訓練法の臨床効果測定用尺度 (ATCES) を開発し、信頼性と妥当性を検討している。また伊藤 (2AM063) は、スクールカウンセリングにおける学級風土質問紙の利用を検討している。

(2) 様々なアプローチ—個人アプローチとグループアプローチ—

小学生を対象に学級単位の社会的スキル訓練 (CSST) (椎葉, PA81) が、中学生には音楽療法的アプローチ (山本・小林, PC91)、ストレスマネジメントプログラム (三浦・上里, PC92)、ソーシャル・スキル・トレーニング (SST) (渡辺・山本, PE77)、及び読書 (松尾, PG81) が用いられている。また、高校生にはナラティブ・アプローチ (川島・塩見, PG73) が、大学生には構成的グループエンカウンター (SGE) (中居・河村, PG80) が行われている。

森 (2002) は、自己開示に抵抗感のある女子専門学校生を対象に、構成的グループ・エンカウンターと比較して想定書簡法が自尊感情を高めるのに効果的であることを明らかにしている。栗原 (2002) は、学校における短期カウンセリングモデル (25 分×5 回) を試作している。我妻 (PF84) は、学校現場へアクティブカウンセリングを応用しようとしている。インターネットを利用したキャリア

カウンセリング(荒尾ら, PG74)が, 中学・高校で行われている。

この他には, 遺伝カウンセリング(山田ら, PF82), 性感染症(柳原・齊藤, PE83)などが扱われている。

4. まとめと今後の課題

紙面の関係もあり, ここでは簡単にまとめと今後の課題を述べておく。

- (1) 今年度に行われている教育臨床研究を概観したところ, 小学校, 中学校, 高校, 大学を現場としてほぼまんべんなく研究されているが, 特に中学校と大学を現場とした研究が多くなされていることがわかる。小学校, 中学校, 高校を現場とする実践や研究はスクールカウンセラーの導入と共に増えており, その内容を変化させながらもこのような傾向は今後もしばらく続くだろう。スクールカウンセリング特有の経験や取り組みが蓄積されてきているので, 知見を抽出するとともにその知見から具体的な提言が出てくることが期待される。
- (2) 教育場面でのスクールカウンセラーや教師カウンセラーによる援助は, 不登校をめぐる当事者や関係者ばかりでなく, 発達障害, 自閉症, 非行などへと拡大してきている。スクールカウンセラーに関する教員の意識調査はよく実施されているが, 例えばスクールカウンセラーについての児童・生徒の意識調査がほとんどみられない。この種の児童・生徒に役立つ調査が今後必要だろう。スクールカウンセラーの役割や活動は多様になりつつある。スクールカウンセラーの量的増大と質的向上ともに, 実践, 教育研修, 研究のバランスがはからねばならない。現場教員へのサポートもさることながら, スクールカウンセラーへの全体的サポート・システムを確立していくことが求められる。
- (3) 教育臨床の実践や研究の推進には, 教育現場や地域社会における異なる職種や立場の関係者, 教育臨床の近接学問領域の実践者や研究者などとの連携・協働がさらに必要になるだろう。
- (4) 現状では, 質的な研究よりも数量的な調査研究が多くなっている。特に, 児童・生徒・学生及び教師を対象にした調査研究が多い。しかし貴重な臨床実践研究や心理教育実践の実験的研究がみられる。臨床事例や臨床群を対象にした研究は, 臨床心理アセスメントや心理治療の事例報告や事例研究という形でみられている。質的研究がさらに期待される場所である。
- (5) 健常者(児童・生徒・学生)を対象にして, 臨床的に重要な概念を測定する尺度や質問紙を作成する研究がかなり多くみられる。一般的または発達の傾向の把握も

意味があるが, これらの尺度や質問紙を個人の理解や援助など教育臨床実践活動にどのように活かしていくかということが, 今後求められるだろう。また, 事例研究から得られた知見を量的な研究で実証していく作業も必要である。つまり質的データと量的データの相互発展的検証が求められる。

- (6) 個人アプローチ, グループアプローチ, チームアプローチを含めて様々なアプローチや方法が提出され, 報告されている。これらを洗練させ統合して, いずれは効果的な学校臨床や問題に応じたアプローチ・モデルや相談システムを構築していく必要があるだろう。

引用文献

- 相澤直樹 2002 自己愛的人格における誇大特性と過敏特性 教育心理学研究, **50**, 215-224.
- 浅田由紀子・中村 健 2002 学校現場における教育相談係活動の有効性—A子のカンニング問題への対応を中心に— 教育心理学会44回総会発表論文集, 273.
- 荒尾真一・西山久子・石橋太加志・小山洋司・山本 力・田中宏二 2002 中・高等学校におけるインターネットを利用したキャリアカウンセリングのあり方の研究 教育心理学会44回総会発表論文集, 638.
- 遠藤みゆき・栗加 均 2002 スクールカウンセラーの受理相談の分析(6)—千葉県スクールカウンセラーの属性III— 教育心理学会44回総会発表論文集, 445.
- 藤枝静暁・相川 充 2001 小学校における学級単位の社会的スキル訓練の効果に関する実験的検討 教育心理学研究, **49**, 371-381.
- 藤村一夫・河村茂雄 2001 学級生活に対する児童認知とそれを推測する担任教師の認知とのずれについての調査研究 カウンセリング研究, **34**, 284-290.
- 藤田博康 2002 非行臨床における実践的アプローチモデル 心理臨床学研究, **20**, 76-88.
- 福井康之 2001 新しく出現したタイプを含む対人恐怖の質問紙調査による分類の試み 心理臨床学研究, **19**, 477-488.
- 古市裕一・辻 眞帆 2002 学校に行きたくないとき, 学校を休む子と休まない子(2) 教育心理学会44回総会発表論文集, 555.
- 萩原久子・五十嵐哲也 2002 中学生における不登校傾向に関する研究(2)—被援助志向性との関連— 教育心理学会44回総会発表論文集, 276.
- 原裕貴子 2002 中学校教師は, スクールカウンセラーのどんな援助を望んでいるか—SC配置校, 非配置校比較質問紙調査と, インタビュー調査から考える— 教育心理学会44回総会発表論文集, 68.

- 早野洋美 2002 男子大学生の摂食障害傾向に関する心理学的研究 心理臨床学研究, **20**, 44-51.
- 東 知幸 2001 引きこもりがち不登校生徒に対するメンタルフレンドによるアプローチ 心理臨床学研究, **19**, 290-300.
- 平岡永子・乾原 正 2002 中学校教師のバーンアウトの因果関係について 教育心理学会44回総会発表論文集, 75.
- 元宮幸孝 2002 臨床心理行為(不登校への援助) 心理学会66回大会発表論文集, 223.
- 一丸藤太郎・倉永恭子・森田祐司・鈴木健一 2001 通り魔殺人事件が児童に及ぼした影響 心理臨床学研究, **19**, 329-341.
- 五十嵐哲也・萩原久子 2002 中学生における不登校傾向に関する研究(1)―不登校傾向尺度の開発― 教育心理学会44回総会発表論文集, 275.
- 飯田順子・石隈利紀 2001 中学生の学校生活スキルに関する研究―学校生活スキル尺度(中学生版)の開発― 教育心理学研究, **50**, 225-236.
- 生月 誠・宮内裕子・山口 剛・越川房子 2002 自律訓練法の臨床効果測定用尺度(ATCES)の開発―尺度の信頼性, 妥当性の検討― 心理学研究, **72**, 475-481.
- 今津芳恵・萩野佳代子 2002 スクールカウンセラーのストレスに関する研究 III―勤務形態および個人属性との関係― 教育心理学44回総会発表論文集, 70.
- 井村 修 2001 臨床心理学研究の動向と課題 教育心理学年報, **40**, 123-132.
- 井上一三・塩見邦雄・木下久美子・川口まどか 2002 テレビゲームが中学生の心理に及ぼす影響について(II) 教育心理学会44回総会発表論文集, 550.
- 石川秀樹 2002 自閉症児の《見通しの展開》と《コミュニケーションの広がり》 教育心理学会44回総会発表論文集, 557.
- 伊藤亜矢子 2002 スクールカウンセリングにおける学級風土アセスメントの利用②―個人の学級認知への着目― 心理学会66回大会発表論文集, 2732.
- 伊藤まゆみ・田上不二夫 2002 パニック障害の大学生に担任が学習の場で行うカウンセリングの効果 教育心理学会44回総会発表論文集, 563.
- 伊藤美奈子 2002 おもに教育現場に関わる臨床心理学的研究の動向と課題 教育心理学年報, **41**, 114-123.
- 伊藤 拓・上里一郎 2002 ネガティブな反すうとうつ状態の関連性についての予測的研究 カウンセリング研究, **35**, 40-46.
- 甲木有紀・中村 健 2002 不登校支援事業の現状と今後の課題① 教育心理学会44回総会発表論文集, 558.
- 金木智子・塚野州一 2002 学校適応度ごとの児童・生徒における自己の価値づけ(2) 教育心理学会44回総会発表論文集, 447.
- 粕谷貴志・河村茂雄 2002 学校生活満足度尺度を用いた学校不適応のアセスメントと介入の視点―学校生活満足度と欠席行動との関連および学校不適応の臨床像の検討― カウンセリング研究, **35**, 116-123.
- 加藤弘通・大久保智生 2002 問題行動と生徒文化の関係についての研究(4)―問題行動が起こるクラスと起らないクラスの比較― 教育心理学会44回総会発表論文集, 562.
- 川口まどか・塩見邦雄・木下久美子・井上一三 2002 テレビゲームが中学生の心理に及ぼす影響について(I) 教育心理学会44回総会発表論文集, 549.
- 川原誠司・田代知葉 2002 教師の持つ信念とその不合理性についての研究(2)―信念と不合理性の組み合わせによる検討― 教育心理学会44回総会発表論文集, 80.
- 河本 肇 2002 適応指導教室の目的と援助活動に関する指導員の意識 カウンセリング研究, **35**, 97-104.
- 川島範章・塩見邦雄 2002 高校教育相談におけるナラティブ・アプローチ 教育心理学会44回総会発表論文集, 637.
- 久保田純・林 直樹・上村恵津子・永松裕希 2002 中学生の通常学級における特別な教育的ニーズのある生徒への援助―スチューデント・サポート・チームを適用した援助事例から― 教育心理学会44回総会発表論文集, 553.
- 久能弘道・黒川修子・正岡優子 2002 特別支援ニーズを有する不登校生徒への学習支援と保護者面接 教育心理学会44回総会発表論文集, 456.
- 栗原慎二 2002 学校における短期カウンセリングモデルの研究 カウンセリング研究, **35**, 30-39.
- 栗原慎二・上地安昭 2001 学校におけるカウンセリングの動向と今後の方向性―ブリーフカウンセリングを中心に― カウンセリング研究, **34**, 329-340.
- 栗加 均・遠藤みゆき 2002 スクールカウンセラーの受理相談の分析(5)―千葉県スクールカウンセラーの属性III― 教育心理学会44回総会発表論文集, 444.
- 桑代智子・郷間英世・森下 一 2002 ひきこもり青年の心理状態について―バウムテストによる検討― 教育心理学会44回総会発表論文集, 280.
- 小林朋子 2002 教師の援助行動に与えるコンサルテーションの内容に関する検討―スクールカウンセラーによる教師への援助サービスとは?― 教育心理学会44

- 回総会発表論文集, 271.
- 小林朋子・佐藤広江・杉山雅彦 2002 不登校状態のまま中学を卒業した少女の問題行動に対する行動カウンセリング的介入 カウンセリング研究, **35**, 163-172.
- 児島明男・佐々節子・西田泰敏・徳増典子 2002 友だちが出来ないと訴える生徒の相談事例(2)(高校1年生男子) 教育心理学会44回総会発表論文集, 443.
- 松本 剛 2002 ひきこもりから抜け出した女子学生との面接 心理臨床学研究, **20**, 64-75.
- 松尾直博 2002 中学生が認識した読書の心理的影響 教育心理学会44回総会発表論文集, 645.
- 松崎くみ子・大矢幸弘・赤澤 晃・古荘純一・飯倉洋治 2001 小児アレルギー疾患と不登校 心理臨床学研究, **19**, 501-512.
- 三根久代・上田哲世・中川香子 2002 保育職における心理的ストレスに関する調査研究(I)ーストレス反応の程度と勤務先, 勤続期間による差異の検討ー 教育心理学会44回総会発表論文集, 71.
- 三浦正江・上里一郎 2002 中学校におけるストレスマネジメントプログラムの実施と効果の検証 教育心理学会44回総会発表論文集, 283.
- 森美保子 2002 自己開示抵抗感のある学生に対する想定書簡法の効果ー構成的グループ・エンカウンターと比較してー カウンセリング研究, **35**, 20-29.
- 中居千佳・河村茂雄 2002 SGEの構成メンバーの違いによる個人過程の検討 教育心理学会44回総会発表論文集, 644.
- 中村 健 2002 「心の教室」学生相談員と教師の協働についてー「心の教室」学生相談員の意識調査よりー 教育心理学会44回総会発表論文集, 272.
- 中島千加子 2002 自己物語の変容に見られる非行少女の立ち直り過程ー少女は過去・現在・未来の自己とどう向き合い, 非行から立ち直ろうとしていくのかー 教育心理学会44回総会発表論文集, 635.
- 西村昭徳 2002 教職員間の関係性についてのピリーフと職場信頼感の関係 教育心理学会44回総会発表論文集, 74.
- 西坂小百合 2002 幼稚園教諭の精神的健康に及ぼすストレス, ハーディネス, 保育者効力感の影響 教育心理学研究, **50**, 283-290.
- 野々村説子 2001 学校教師へのコンサルテーション 心理臨床学研究, **19**, 400-409.
- 及川 恵 2002 気晴らし方略の有効性を高める要因ープロセスの視点からの検討ー 教育心理学研究, **50**, 185-192.
- 岡田佳子 2002 中学生の心理的ストレス・プロセスに関する研究ー二次的反応の生起についての検討ー 教育心理学研究, **50**, 193-203.
- 小野昌彦 2001 男子小学生不登校への午後登校法適用による援助 カウンセリング研究, **34**, 311-317.
- 小塩真司・中谷素之・金子一史・長峰伸治 2002 ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性ー精神的回復力尺度の作成ー カウンセリング研究, **35**, 57-65.
- 佐野友泰・田中亜子 2002 コラージュ作品の特性とメンタルヘルス指標の関連(I) 教育心理学会44回総会発表論文集, 448.
- 佐々木淳・星野崇宏・丹野義彦 2002 精神病理の症状と性格5因子モデルとの関係 教育心理学研究, **50**, 65-72.
- 佐藤 静 2002 コラージュ制作者の性格特性と作品特性 心理学研究, **73**, 192-196.
- 瀬戸美奈子・石隈利紀 2002 高校におけるチーム援助に関するコーディネーション行動とその基盤となる能力および権限の研究ースクールカウンセラー配置校を対象としてー 教育心理学研究, **50**, 204-214.
- 椎葉亮一 2002 CSSTによる対人的自己効力感の促進 教育心理学会44回総会発表論文集, 81.
- 清水健司 2001 青年期における対人恐怖心性と孤独感との関連 心理臨床学研究, **19**, 525-534.
- 清水健司・海塚敏郎 2002 青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の関連 教育心理学研究, **50**, 54-64.
- 塩路良枝 2002 過食症により不登校になった高校生の事例 教育心理学会44回総会発表論文集, 639.
- 下坂 剛 2001 青年期の各学校段階における無気力感の検討 教育心理学研究, **49**, 305-313.
- 菅野 純・綿井雅康・養地一夫 2002 「精神的充足・社会的適応力」評価尺度の臨床・教育的検討(2)ー問題行動を測定する項目の教育相談的な妥当性についてー 教育心理学会44回総会発表論文集, 455.
- 杉原保史 2001 過剰適応的な青年におけるアイデンティティ発達過程への理解と援助について 心理臨床学研究, **19**, 266-277.
- 杉崎雅子 2002 中学校教員を対象とした発達障害についての調査ー認知度, 経験度, 困っていること, スクールカウンセラーに望むことー 教育心理学会44回総会発表論文集, 632.
- 鈴木英一郎・小塩真司 2002 対人的傷つきやすさ尺度作成の試みー信頼性・妥当性の検討ー 教育心理学会44回総会発表論文集, 278.
- 高倉和子 2002 小学校における描画テストの活用に関する研究(2)ー動的家族画(KFD)にみられる性差と

- 単親家庭の児童の描画特徴— 教育心理学会44回総会
発表論文集, 67.
- 高野 明・宇留田麗 2002 援助要請行動から見たサー
ビスとしての学生相談 教育心理学研究, **50**,
113-124.
- 瀧野揚三・宮本靖子 2002 教育相談において生徒が期
待する教師の対応 教育心理学会44回総会発表論文集,
556.
- 田村修一・石隈利紀 2001 指導・援助サービス上の悩
みにおける中学校教師の被援助志向性に関する研究
—バーンアウトとの関連に焦点をあてて— 教育心理
学研究, **49**, 438-448.
- 田村修一・石隈利紀 2002 中学校教師の被援助志向性と
自尊感情の関連 教育心理学研究, **50**, 291-300.
- 田中亜子・佐野友泰 2002 コラージュ作品の特性とメ
ンタルヘルス指標の関連(II) 教育心理学会44回総会
発表論文集, 449.
- 田中健夫 2002 学生相談における“学ぶことの困難”
の情緒体験と面接での関わり 心理臨床学研究, **20**,
122-132.
- 田中有可里 2001 高校生における食行動異常と痩せ願
望 カウンセリング研究, **34**, 300-310.
- 田代知葉・川原誠司 2002 教師の持つ信念とその不合
理性についての研究(1)—信念と不合理性の様相に注
目して— 教育心理学会44回総会発表論文集, 79.
- 塚野州一・金木智子 2002 学校適応度ごとの児童・生
徒における自己の価値づけ(1) 教育心理学会44回総
会発表論文集, 446.
- 外川江美・岡田守弘 2002 TAT を用いた非行少年の
教育効果査定に関する研究(2)—被検者の意図が混入
した反応の解釈について— 教育心理学会44回総会発
表論文集, 453.
- 上原貴夫 2002 自然体験キャンプを経験した不登校小
中学生のその後の状況に関する継続的研究 教育心理
学会44回総会発表論文集, 69.
- 宇留田 麗 2002 大学教員による学生相談機関の活動
の評価 教育心理学会44回総会発表論文集, 641.
- 我妻則明 2002 アクティブカウンセリングの学校現場
への応用 教育心理学会44回総会発表論文集, 554.
- 綿井雅康・菅野 純・藁地一夫 2002 「精神的充足・社
会的適応力」評価尺度の臨床・教育検討(1)—生徒理
解との関係について— 教育心理学会44回総会発表論
文集, 454.
- 渡部未沙 2002 母親面接を中心に担任との連携により
展開した事例 心理臨床学研究, **19**, 578-588.
- 渡辺弥生・山本弘一 2002 中学生におけるソーシャ
ル・スキル・トレーニング(SST)の予防的効果 教
育心理学会44回総会発表論文集, 451.
- 山田一之・山田祐子・和田圭司・後藤雄一 2002 遺伝
カウンセリング—家族性精神疾患の事例— 教育心理
学会44回総会発表論文集, 552.
- 山本恵子・小林敬子 2002 中学校における音楽療法的
アプローチの試み：第1報 教育心理学会44回総会発
表論文集, 282.
- 柳原利佳子・齊藤誠一 2002 現代青年のSTDの理解
と健康帰属傾向との関連 教育心理学会44回総会発表
論文集, 457.